

Title	<書評> Mike Gane, "Baudrillard : Critical and Fatal Theory", ROUTLEDGE, 1991
Author(s)	門部, 昌志
Citation	年報人間科学. 15 P.179-P.183
Issue Date	1994
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/4155
DOI	10.18910/4155
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

Mike Gane

Baudrillard: Critical and Fatal Theory

ROUTLEDGE, 1991

門部 昌志

八〇年代にボードリヤールの理論が流行して以来、次々に変貌するポストモダンの思想家というレッテルを彼は貼られてきた。現在の日本では、本格的研究書の出版されることのないままボードリヤールは忘却されつつあり、彼に対する一般的な非難の多くは流行の裏返しであったことも気づかれることがないようである。

著者マイク・ゲーンは本書を含めた二冊のボードリヤール研究書を出版し、ボードリヤールのインタヴュー選集を編集している。彼はまた、八〇年代半ば以降のイギリス社会学において、新たなデュルケム研究の潮流に属する研究者の一人でもある。デュルケム研究者としての視点は、著者によるボードリヤール読解の底流をなしており、本書を読む際に留意すべき点の一つであろう。

だが彼のボードリヤール読解を生みだす直接的契機として、八七年に出版されたボードリヤールの著作『彼自身による別人』¹を忘れることはできない。日本ではまだ翻訳のないこの小著は、誘惑論以降のボードリヤールが自らの理論的立場を概説したものであり、いわば彼自身によるボードリヤールと呼ぶべき貴重な著作となっている。ボードリヤールの言述には二つの立場の葛藤が孕まれているというゲーンの主張は、この著作の第五章「物の体系から物の運命へ」の中にその根拠を持っている。後期ボードリヤールのテキストにおいて示されたこの分裂を、ゲーンは初期の著作の中に見出し、異なる理論的立場が相剋する結果としてボードリヤールの理論的転位が生じたと主張する。本書第一部でなされるのは、ボードリヤールの

仕事が二重のプロジェクトにはかならないという彼の仮説の提示であり、ボードリヤール読解の方法に関する議論である。さらに、ボードリヤール理論の背景をなす人物が解説され、英語圏における受容において形成されたボードリヤール像が丹念に検討されている。第Ⅱ部、第Ⅲ部においては、『記号の経済学批判』等、ボードリヤールの個々の著作を論じることにより、第Ⅰ部で示した仮説の検証がなされる。第Ⅳ部は「二重の螺旋」と題された結論部分である。オーソドックスな社会分析から、詩、文学の混合へと移行した後期ボードリヤールの理論を検討した上で、二重螺旋の問題やデュルケムとの対比からボードリヤールの著作が総体として評価される。

本書は、一般的な解説書であると同時に、ゲーン独自のボードリヤール論でもある。もちろん、本稿の目的は後者に焦点をあてることにある。したがって、著者の見解が最もよくあらわれている第Ⅰ部と第Ⅳ部を中心に順を追って紹介することにした。

序章においてマイク・ゲーンは、二つの異なる理論的立場から生じる内的な緊張がボードリヤールの著作には孕まれており、ボードリヤールの知的遍歴は二つの立場が互いにせめぎあう過程として理解できるとのべている。ゲーンによれば、この二つの立場はマルクスとデュルケムのそれである。前者はニーチェ、アルチュセール、アドルノを媒介として、そして後者は、モース、バタイユを媒介として、ボードリヤールによって徹底化されている。

このマルクスとデュルケムという問題を理解するには、ボードリ

ヤールの歴史観を手がかりとするのが最も良い。ゲーンによれば、ボードリヤールは次の三つの観点から世界史を把握しているという。すなわち、

- ① 原始的象徴文化（記号の要素は存在しない）
- ② ヒエラルキーと象徴文化の社会（記号の循環は限定される）
- ③ マスソサエティ（記号の循環が優位となる）

の三つである。マルクス主義においてこの図式の①は、非歴史的な原始共産社会に、②は階級社会に対応している。デュルケムの視点によれば、①は環状社会であり、②は有機的連帯にもとづく社会に向かっている。このように、ボードリヤールの歴史観においては、マルクスとデュルケムの視点の協働が可能なのであり、両者を延長した場所に、ボードリヤール自身の探究が位置している。ボードリヤールが構築するのは、主として①象徴文化と③マスソサエティの新たな理論である。ただし、ボードリヤールは二つの文化を分析するばかりでなく、象徴文化の観点から、脱呪術化したマスソサエティ、すなわちシミュレーション秩序への批判を行っていることも忘れるべきではないだろう。

ボードリヤールにおける基本的な問題は、ゲーンによって以上のように再構成された。だが、より詳細に眺めるならば、ボードリヤールに孕まれた分裂は、シミュレーションの各段階で変わるべき性質をもっている。その第一の理由は、ある段階に対抗するべく発展させられた批判が、情性によって次の段階へと自己保存すべきでない、というボードリヤールの主張にもとづいている。

そして第二の理由は、彼の分析基盤が同質的なものではなく、問題の時代とそれに先行する時代の両者をよくむ異質的なものであることに関連する。たとえば、近代化のプロセスは、それと対照的な原理をもつ以前の勢力を活性化することがある。つまり、近代化のプロセスそのものが、自らへの批判をひきおこす場合である。リアリティの新たな秩序に対抗するそれらの批判は、嘲笑、イロニー、パロディといった術によってなされるが、ボードリヤールにとってこれらの批判は充分なものではない。それらは象徴交換による戦略と結合されなければならない。それぞれの時代における支配的秩序によって逆説的に生みだされた有力な批判勢力と、象徴交換の戦略とを接合すること、それには当然、時代に応じて異なる戦略の組みあわせが必要となるはずである。ボードリヤール理論の重心がシミュレーションの各段階で変化する理由がここにある。

ボードリヤールの仕事をゲーンが二重のプロシエクトと呼ぶのはまさにこのような意味においてである。各時代において優勢な批判力と象徴交換に基づく批判の結合とは、近代システム内部のラディカルな差異にもとづく批判と近代システム外部のラディカルな変革性にもとづく批判との結合と言いかえられる。要するに、システムの内部と外部の双方における批判的諸力を最も効果的な仕方各時代に組み合わせることが二重のプロシエクトである。ゲーンによれば、二重に折り重ねられたこの戦略は、実は、新しいものではない。ある時期のマルクス主義もまた、おそらくは意識することなくこの

原則内で活動してきたというのである。すなわち、システムの内部における批判には被抑圧者の観点と科学が対応し、システムの外部における批判には共産主義の原理（ボードリヤールにおける象徴交換）が対応する。したがって、ボードリヤールの一般的なイメーシが彼の奇抜さを誇張するのとは反対に、ボードリヤール理論の根幹にはオーソドックスなマルクス主義的発想を独特のやり方で現代に受け継いだ二重の戦略があるのである。

以上がゲーンによる仮説の大枠だが、その基盤となった読解の方法は次のようなものである。初期ボードリヤールには、記号表現と記号内容の等価性によって特徴づけうる生産の時代に属する著作が多数あり、読者の多くもまた生産主義的な読解スタイルを行ってきた。しかしながら現在では、ボードリヤール自身がそうした読解に批判的である。また、より重要なのは生産の時代が現在では過ぎ去ったことであり、「ボードリヤールにとって生産主義的な批評を反生産主義的な批評にかえるほど、世界それ自体、資本主義の秩序が変化した」ことである。つまり、生産主義に属する徴候的読解はもはや適切なものではない。むしろ、「単一の思考や統合された決定過程のもとでプロシエクトが制御されているかのように同質的な主体やテキストを前提にする読解の有効性に疑問をなげかける」必要があるのである。これを理由にゲーンは、ボードリヤールの意図を越えて著作を読みこもうとする。彼の読解は、ボードリヤールの言葉をなぞって繰り返す解説という形で、多層化したテキストの継ぎ目をほどこき、孕まれていた分裂を露呈させる。

著作解説と仮説の論証がなされる第Ⅱ部において、ゲーンは『記号の経済学批判』を重点的に論じている。というのも、六九年から七二年までの論文集であるこの著作はまさに過渡期のテキストであり、二つの立場の拮抗を明瞭に見出しうるからである。たとえば六九年に発表された「記号の機能と階級の論理」では、マルクス主義とデュルケムの観念との混合が見出せるとゲーンはいう。この論文では、生産システムは新中産階級と彼らの社会的地位を示す文化を作りだしたとされるが、これは明らかにマルクスの階級の視座に基づいている。だが、彼が消費過程の分析に向かう時、モースやデュルケムに由来する象徴交換論が優位となっている。

高度の理論的密度をもつ論文「一般理論のために」では、矛盾を解決する必要から、鍵概念が正反対に変更される。まず、使用価値の概念はシステムの内的な産物にすぎないものと再定義され、象徴交換は資本主義システムの外部、つまり非価値の領域にあると見なされる。ボードリヤールの立場がシフトするのはこの時からである。抑圧された階級の立場から、システムに外在する象徴交換者の立場へ転位し、記号の経済学批判が行われる。ボードリヤールの二重化したプロジェクトにおける重心は、この時期において、マルクスからデュルケムへと移動したのである。そして資本主義と同様の生産中心主義をマルクス主義に見出した『生産の鏡』の後、主著『象徴交換と死』において、象徴交換論が結実する。

第Ⅲ部で言及されるのは、後期ボードリヤールの著作である。とりわけ『誘惑の戦略』に関して言えば、この著作で論じられる誘惑

は、主体から客体への認識論的シフトを除けば、基本的にはかつての象徴交換に対応する用語である。誘惑の戦略は、いまや深みを欠いた現代文化において象徴交換プロセスと近似した力を見出すことを可能にする。この『誘惑の戦略』の他に、『沈黙する多数派の影で』、『宿命の戦略』、『アメリカ』といった著作が言及される。幾つかの留保を行いながらも、これら後期の著作に関してゲーンは、それがデュルケムのバースペクティブに近いと述べている。こうして、ボードリヤールの著作を総体として眺めた時に見出せるのは、マルクスからデュルケムにいたる力点の移動である。ただし注意すべきなのは、この背後にあくまでも二重の螺旋が存在すること、つまり、二つの立場の葛藤が潜在的に維持されていることである。ボードリヤールを「批判と宿命の理論」と呼ぶ本書の副題は、まさにこの観点から理解されねばならない。

「二重の螺旋」と題された第Ⅳ部では、ボードリヤールの分裂したプロジェクトが再び記述される。出発点であるニーチェ、ヘルダーリンへと回帰したボードリヤールは、誘惑論以降、社会分析から文学や詩の混合へと著作の形態を変え、説明を可能にする距離を放棄した。だが、彼のこうした転位にもかかわらず、持続する何ものかを著作全体に見出すことができるのである。ゲーンはボードリヤール自身の回想を主要な根拠としつつ、彼のプロジェクト全体を二つの研究の糸にそった運動、すなわち二重の螺旋であるとす。一方に、象徴、可逆性、アナグラム、誘惑、悪の原理を通じて深化する象徴文化の研究があり、他方には、近代環境、消費、シミュレーシ

ヨン、マスカルチャーの分析がある。ボードリヤールは前者を聖なるものとして、後者を墮落したものとして取り扱う。ただし、それが象徴的なものを現出させる場合のみ、彼はシミュレーション文化を否定しない。近代システム自身が新しい曲線を描いて（カタストロフィ）反転し、異なる世界の始まることが彼の希求するものである。

ゲーンはこの二重の螺旋をデュルケムとの対比においても記述する。仮にデュルケムが、アノミーの理論をノルム、すなわち正常を定義づけるために発展させたのだとすれば、ボードリヤールにとってのノルムとは中世のギルドではなく象徴文化である。象徴交換を永遠に回帰させる儀礼をルネサンス以来破壊してきたシミュレーションの文化は、定義上、病的なものとなる。ボードリヤールの二重の螺旋とは、象徴交換の理論、及びルネサンス以降の西欧近代文化に関する病理学と系譜学の複合化した運動体なのである。

本稿を締め括る前に、英米のボードリヤール研究における本書の位置についてふれておかねばならない。ボードリヤール研究ではダグラス・ケルナーの著作が有名であり、「二重の螺旋」の問題に関しては、すでに彼もごく簡単に取り上げている。後期ボードリヤールが完全に否定されるこのケルナーの著作に対し、ゲーンは本書中で徹底的な批判を行っている。もしゲーンの議論に独自性があるとするならば、「二重の螺旋」とデュルケミアンの視座からボードリヤール主要著作の精緻な再読を実行したこと、さらにそれによって、

ケルナーに代表される、後期ボードリヤールへの誤解に基づく非難に対して反論したことがあげられる（ただし、本書はあくまでもケルナーの著作と相補的に読まれるべきである）。

「二重の螺旋」がボードリヤール自身に由来する言葉であるとはいえ、本書で提示された読解はあくまでもゲーンによる再解釈である。だが、二重螺旋の問題の重要性を提起し、従来までのボードリヤール批判の多くが生産主義的読解に基づいていたことを照らし出した点は評価されてよい。ボードリヤール自身が「二重の螺旋」について語る優れたインタヴューの編集とともに、マイク・ゲーンは本書によってボードリヤール研究に貴重な功績を残したのである。

注

- (1) Jean Baudrillard, *L'autre Par lui-même*, galilée 1987, pp.68-69.
- (2) Douglas Kellner, *JEAN BAUDRILLARD From Marxism to Postmodernism and Beyond*, Stanford University Press, 1989, p.176.
- (3) Mike Gane (ed), *Baudrillard Live: selected interviews*, Routledge, 1993. 二重の螺旋については pp.201-202. を参照。